

## ★北京民国大学アナキスト学生グループの活動

北京民国大学アナキスト学生グループは、1930年6月申鉉商、崔錫榮、車東鼓、3同志が湖南銀行で巨資を得て北京へ行く時、在中国朝鮮無政府主義者代表者会議が招集されたが、この時、北京民国大学生グループもこれに出席していった。そして李乙奎、金宗鎮、申鉉商、崔錫榮、丁來東、吳南基、鞠淳葉、車鼓東などが中国警察を前面に立てた日本領事館警察の急襲を受けて、逮捕された時、柳基石は当時の北京市長張某氏と接触し、申、崔両同志を除いた残り同志達を無事に釈放させた。

1930年11月金芝江、楊汝舟、金東守、鄭華岩らが天津で資金を奪取し北京へ行く時、在中国朝鮮無政府主義者連盟同志達の北滿行を準備を周旋する役割をしたのも、これら北京民国大学生グループであった。

1931年7月万宝山事件が起った時、北京民国大学アナキストグループは韓・中國人間の誤解を一掃するため檄文散布、新聞投稿などでこの不幸な事件が日帝の韓中離反策の一環であることを明白にせんと猛活躍を展開した。

同年9月18日満州事変が勃発した直後、柳基石、丁來東、吳南基、趙成史、鞠淳葉、金用賢と軍出身の中国同志陳、鄭などを中心として抗日救國連盟を組織して日帝打倒の檄文を散布し、同連盟は同年12月趙成史を、日本軍と最後まで抗戦した黒竜江省の馬古山將軍に送って激励すると同時に、後方かく乱作戦についての連絡をとした。趙成史の帰京と同時に在満各地中国部隊に檄文を送って抗戦宣伝工作を展開した。

1932年12月に柳基石、柳基文、李容俊、元心昌らが天津の日本各機関に投弾する時、北京民大グループは北京で後方連絡を担当して拳銃の万全を期すように協力した。

1933年1月熱河省、古北溝で何応欽の中央軍と日本軍の間に満州事変以来、最も激烈な戦闘が繰り広げられている時、中国同志鄭の財政支援のもと義勇軍を結成する

や、北京民大グループは天津、南京、上海、福建、泉州等各地の同志たちを訪ね討議した結果、一部同志達が先発し、北京に集まっているおりに、何・梅津停戦協定が成立したので、当初の計画を変更し宣伝工作に力を傾けた。

#### 4. 戰時工作隊

1937年10月満州事変が全面的な中日戦争に拡大し、第2次上海事変が起った時、南華韓人青年連盟は同年11月安徽、南部上饒地方に根拠地を移し、韓中合同遊撃隊を組織し、安徽、江西、福建、湖北など各省にわたり遊撃戦をくり広げた。

1938年から李 유격<sup>ユグク</sup>は中国軍及び連合軍と協力する目的で戦時工作隊を編成し、その隊は羅月煥、李何有、朴基成らの韓国青年戦地工作隊として西安の胡宗南部隊と協力した。他の一隊は鄭華岩、柳祭、柳子明、李剛などで、その一隊は慶祝同軍団の第3戦区で漢奸除去工作、学徒兵帰順工作、欧米人捕虜救出工作など猛活動を展開した。捕虜救出には連合軍空軍司令官“ショウ”将軍と合作して、漢奸除去工作には柳子明の弟子、立達学院出身中国人青年、岳國華、金言などと合作した。

#### 5. 韓国青年戦地工作隊

1931年の満州事変と1932年の上海事変以来、中国の朝鮮アナキスト運動は戦前期にさしかかってから、南華韓人青年連盟が結成されて、抗日救國連盟（世称 黒色恐怖団）が組織され、日帝の侵略に抗戦する一方、毛澤東に対するせん滅戦を繰り広げていた。1937年の中日戦争以降は再び羅月煥、朴基成、李何有などの若川閣士達がこれに参列していった。

1938年からは、日本軍の進攻に耐えられず南京政府が重慶へ遷都して韓國臨政も南京政府に従い重慶へ根拠地を移した。この時、南京と上海で活動していた若川アナキスト閣士達は韓国青年戦地工作隊を組織して中日戦争第一線へと進出し実戦に参加した。

戦地工作隊の部署は次のとおりである。

隊長、羅月煥、副隊長・金東洙（金剛）、政治組長・李何有、  
軍事組長・朴基成、宣伝組長・李海平（李在賢）　隊員11名

1年後この工作隊は100名に成長した。

この部隊は当時、陝西省西安に陣をとり西北防衛を担当していた中央軍第34集團軍司令官 胡宗南 将軍の幹部で、第4戦時幹部訓練団に韓国青年訓練班を新設して訓練を重ね実戦に参加して名譽共に中日戦争に専念した韓国の唯一の部隊<sup>レギIMENT</sup>であった。こ北到るまでには、胡宗南將軍の師である中国アナキスト葉淨秀と胡將軍の秘書や義兄弟である「후보이」という中国アナキストの功が大きかった。

○ 羅月煥の逸話

羅月煥(1907~1940)は全南羅州出身である。1924年に渡り、東京鶴林荘に寄宿しながら、成城中学を卒業した。1931年に上海に渡り南京中央軍官学校漢口分校歩兵科八期生として、1934年に卒業した。当時は張治中教務主任時代で、臨政の紹介なくひは入校許可が下りないよう制度化された。しかし彼は中国人黃紹美の紹介を受けて入校し、優秀な成績で卒業した。卒業後、中国軍憲兵学校で服務したが、南華韓人青年連盟に加盟しアナリスト運動に参加した。彼には次のようなエピソードがある。

彼は上海日租界で領事館警察に逮捕されてアナリスト同志達の住所を言ふよう強要されたが、口を開いて話さなかった。結局2名の護送警官を付けて上海発の船頭舟で本国に押送されることになった。船が日領青島近海を過ぎる時、彼は警官に酒を勧めておいて、ちょっと用便してくるとひょいひょいと歩き行き、悠々自若着物を脱いで海に飛び込んだ。水から泳ぎ出で来た彼は、中国軍部隊に駆け込み身分を明した。そのようにして一ヶ月ぶりに南京に帰還した。この護送中の脱出の逸話はまたたく間に全中国社会に伝わり羅月煥は一躍英雄となつた。どうして彼は中国軍官学校教授資格バッジをぶら下げて往来できる特別待遇を受けた。

朴基成(鳴陽軍、1905~)は忠北・鎮川で朴汝容の一人息子として生まれた。性格が温和で端正であり人の品格を備えた人物である。1924年に東京に渡り鶴林荘に寄宿しながら成城中学を卒業して羅月煥とは中学の時から交際していた親友である。卒業後漢永裕と共に自由青年連盟に加盟し、アナリストとして活動した。1932年万宝山事件直後、一時帰国したが再び中国に入り南華韓人青年連盟に加盟し有吉公使事件(六三亭事件)その他重要活動に参加した。1942年柳林と柳子明が臨政議政院議員として選出された當時、彼は朝鮮無政府主義者連盟員であった。1935年南京中央軍官学校に入學し、1938年11期生として卒業後中国軍通信部隊訓練總監部大尉として服務した。

李鍾鳳(何有、1909~1950)は京畿道仁川で李里奎の次男として生まれた。脚觀と又觀の甥である。1929年12月中等学校在学中、光州学生事件で西大内刑務所で1年間獄苦を受けた。1932年東京に渡り日本大学社会学科に在学中黒友連盟に加盟して留学生藝術団事件で警視庁から手配中の1936年に中国に亡命した。中国へ行った動機は、上海にいる楊汝舟から李東澤(何中)に中国で仕事をする有能な同志を送るよう求められた。彼が何有を推薦したからである。終戦後、彼は朝鮮學典館と申采浩學舎で仕事をした後、帰国した。

この韓国青年戰地工作隊は、どんな政治勢力にも属さない自律的独立軍として出發し、敵の後方へ乱及び情報収集、そして日本軍から脱出してきた朝鮮人将兵の吸收などひめざまい戦功を打ち立てた。臨政はその隊長羅月煥を傘下に包摂しようと、度々重慶に呼び賓賓館に招請させ籠絡を計っていた。これに対して工作隊内に誤解が生じ、そのような中で隊長羅月煥が部下隊員の手で殺されるという突発事故が発生した。数日間羅の姿が見えないのを怪しこだ胡京南部隊が正しく向ふみると、失踪という回答があつた。しかし納得せず徹底した捜

査を行ない、廢井の内の羅の死体を発見した。殺害の原因が部隊内の内紛にあると判断した胡宗南部隊は工作隊の李何有、金東洙、李海平ら幹部以下隊員20余名を逮捕し、軍法会議に附した。こうして工作隊の活動は一時ほどんどマヒ状態におちいってしまった。

臨政系は、自分達の手中に入ろうとはしない工作隊の順調な勢力伸長を好ましく思っていたが、この時に、彼らに救援の手を差しのべるよりは、むしろこの若々勢力を失ることを望み、彼らの処断を胡宗南に要請する書翰を送ることとした。しかし「草書」は胡宗南を極力諫めようとした。韓人の独立運動勢力には各自違いがあり、臨政系だけが唯一のものではなく、全ての韓人武装勢力が必ず臨政の統率の下を絶して連合することと違って、あらゆる抗日戦闘勢力を皆同じ中國軍の友軍として見なけばならないという諫言が効を奏した。これにより下手人2名を提議した後は、1年だけの間に全て釈放された。

### ★光復軍第2支隊

韓国青年戦地工作隊は隊長を金東洙、副隊長を李海平とし、他隊員金天成らは遊撃隊（司令官、黃宇宙）と共に敵後方太行山に到着し、陝州に分隊本部を置き、敵情叢集、愛國青年志士の糾合、敵軍瓦解工作を展開し、應國、張鐵ら50余名の新同志を得て後方の西安部に送った。李海平は分隊長となつて山西省潞安（長治）、太原、北京（金天成責任）、修武、焦作、各所で金容珠らと共に青年糾合、敵軍瓦解工作の拠点を構築した。

1940年朴基成は羅月燠葬礼後重慶から去了。隊長と軍事組長2人の軍官学校出身者を失した後の工作隊は既に旧日の威力を持たなかつた。

1941年韓国光復軍が創設され、韓国青年戦地工作隊は韓国光復軍第5支隊に編入されて、次に再び光復軍第2支隊へと改編された。光復軍第2支隊隊長李範奭將軍とし、金元鳳の第1支隊とあわせて将来の韓国軍根幹であった。

1945年光復軍第2支隊は日本の降伏により戦地工作を終えた。

『独立運動史』臨時政府史には、この第2支隊に廻し、次のように記録されている。

1940年9月17日光復軍総指揮部成立式があり、1941年新年団拜式の後に続いて午後1時より俞海濬の司会で第5支隊結成式があつた。

この第5支隊の前身は羅月燠、李何有、金東洙、李在賢などを中心とした韓国青年戦地工作隊であるが、これらは臨時政府が柳州にある時には、金仁、盧福善ら中国人と共に約50名の宣撫工作隊を組織し、中国軍抗日戦線で宣撫工作を広げ、綦江時代には再び我が青年だけから戦地工作隊を組織し、もつてから西安を根拠地として西北方面に戦地工作を広げ、敵の機密を探知し、多くの青年達を招集し数百名の戦闘部隊をおこしており、その勇敢な愛族救國の活動を早くから高く評価されて来たものである。（独立運動史第4冊 908面）

## 6. 臨時政府への参与

1940年8月臨時政府が重慶に移るが、場所を定めた後戦時体制を備え始めた。また臨時議政院の法定員数が57であるが、在籍人員27で半数にも満たないので補欠選舉が必要であった。1942年10月に政府が選出した23名中、2名の無政府主義者が含まれ、朝鮮革命者連盟の柳子明(忠清道代表)と朝鮮無政府主義者連盟の柳林(慶尚道代表)が同年10月の議政院第34次議会に出席した。(独立運動史 第4冊 963面)

同議会で柳子明は第1分課(法制、請願、懲戒)委員に選出され、趙秦昂、趙琬九、崔錫淳、朴健雄、金廟德、車利錫、安勲、申榮三などと共に約憲修正起草委員に選任された。(同上、996面)

1943年10月の第35次議会で、柳林は朴建雄、趙時元など17名の委員と共に全文7章62条からなる大韓民国臨時憲章改修案を提出した。(同上、997面)この改修案は1919年4月11日上海で公布された臨時憲章10条、同年9月11日公布された全文7章58条臨時約法、1925年7月7日公布された6章35条の臨時憲法、1927年4月11日公布された50条の臨時約憲、1940年10月9日公布された5章42条の臨時約憲に続く5番目の最終的修正案である。この修正案は翌年の第36次議会で通り、臨時政府は「民族の各革命政党と社会主義各党が連合して全民族統一戦線」により樹立された政府だと宣言した。ここに参加した各党派は次のとおり、韓国独立党(金九、趙秦昂、趙琬九、洪震、朴贊翊、趙時元、安勲、車利錫など)、朝鮮民族革命党(金奎植、金元鳳、張建相、金明璽など)、朝鮮民族革命者統一同盟(柳東悦、崔徳新など)、朝鮮無政府主義者連盟(柳子明、柳林、鄭華岩、朴基成、李周録など)、解放同盟(朴健雄、金奎光など)。これらの団体には民族主義者、共産主義者、無政府主義者が網羅されており、全民族の統一戦線という課題に沿ったものである。

1945年4~5月の第38次定期議会で柳林は、趙秦昂、車利錫、安勲、嚴桓燮などとともに第1分課委員に選出されて、同議会で李始榮、曹成煥、黃學秀、趙琬九、車利錫、張建相、朴贊翊、趙秦昂、安勲、金明璽、成周寔、金元鳳、金星淑などと共に國務委員に選出された(同上、1009面)

## 7. 朝鮮学典館と申采浩學舎

1945年8月日本軍の降伏と同時に鄭華岩、李何有などは、中国同志、李石会、吳稚暉、楊家駱、朱沈などの協力を得て朝鮮学典館を設立し、中国での朝鮮学研究の道を開拓しながら、申采浩學舎をここに併設し、丹青を朝鮮の碩学として世界に広く紹介することに力を入れた。この施設は鄭華林の私邸を接收し設置された機関であるが、中国学典館もここに併存していた。

同年 柳林、鄭華岩、許烈秋、柳子明、柳榮など韓国アナキストと朱沈、巴金、瞿修匂など中国アナキストは上海で韓国無政府主義者大会を開いて、両国運動の緊密な連絡と提

携を誓ひ、国際的連帯を結んだ。

訳せなかた部分は原文で載せました。将来、補正版を出すつもりです。  
文中の 南慶 は南京の誤りです。

今後 VOL3: 第3章・第2節・第3節、VOL4以降: 第2章 を出します。  
全部で6~7冊になる予定です。

発行責任者 田代 学

連絡先: 〒607 京都市山科区御陵原町17-19 東山荘103号室  
田代 学へ